

---

# ウレハ

いみたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウレハ

### 【Nコード】

N7681Z

### 【作者名】

いみたん

### 【あらすじ】

クリスマスの夜、真紀は逃げるように地元へと帰郷する。母校の回りを歩いていると、女子中学生にライブのチケットを押し売りされ、しぶしぶと公民館へと入った。

羽柴良太は、親友であるひきこもりな橋本恭介を連れ出すべく、荒療治としてライブへと出かけた。

隆は松尾淳一の紹介でバンドのヘルプを頼まれヴォーカルとしてス

ステージに立った。

ベースの男は遅れている、バンドのヴォーカルが到着するまでの間、時間稼ぎに流行曲をのコピーをしようと隆にもちかけるが、隆はこれに断固として反対した。

そのとき、会場に居合わせた、真紀を指差し、

「あんたにこの曲を捧げる、メリークリスマス！」  
と、言った。

隆のこの行いにベースの男は更に怒りをつのらせ、襟首をつかんだ。騒然とする中、このバンドのメンバーである、山中椿は、場の空気を収めるために、ギターをかき鳴らした。

頃合いを見て、隆は歌い出した。

歌唱力の高い隆の歌声に場内は唖然とする。

居合わせた者は隆にだれも文句を言えなくなった。

隆が会場から出て、バイクのエンジンをかけていると、隆の後を追ってきた真紀が話しかける。

オリジナルだという先ほどの、即興に驚く真紀だった。

二人は意気投合し、逃げるように会場を去った。

## 『第一部』プロローグ（前書き）

この物語は、当初同人ベルゲームで、商用を考えておりましたが、諸事情により、制作を断念いたしました。

イラスト（立ち絵）、物語が半ば出来上がった状態です。

多くの人に楽しんで頂くために、今回公開に踏み切りました。

イラスト（立ち絵）一枚絵などは、アメブロの方で展開していくつもりですので、この作品『ウレハ』をより楽しみたい方はそちらに目を通してください。

<http://ameblo.jp/imitant2/>

## 『第一部』プロローグ

恋人たちが肩を寄せ合い、色とりどりのネオンが街を包む。

だれもが寂しさとは、無縁でありたいと願う今宵焦燥感を隠した女は、電車に揺られ、都会から田舎へと帰郷していた。

時折ため息をつき、窓辺から流れる景色をぼんやりと眺めて、車内に漂う温かい雰囲気押し払うように沈黙している。

数少ない乗客たち、家族連れや、学生カップルは皆幸せそうな顔をし談笑していた。

その中でぼつりと、取り残されたように女は座っていた。

化粧や服装がパツとしすぎ、右手には山、左手には海と、囲まれているこの田舎では、余りにも不釣り合いに見えた。

全体的には小作りな顔立ちをして、さっぱりとした印象だが、端正な顔立ちである。

「SAYAの新曲聴いた？」

「あれってクリスマスソングだよな」

学生カップルは談笑している。それを見て女は、疎ましそうに顔をゆがめた。

電車がゆっくり駅に止まると女は立ち上がった。

構内は巨人が押しつぶしたように低く、一般的な広さからすれば大分狭かった。

駅には人がまばらだった。

改札を通り、女は外に出ると、

「珍しい。この時期、この町に雪が降り積もるなんて……何があったの？ あ　私が帰ってきたからだ」

と自嘲した。

辺りを見て、目の前にあった空席表示のタクシーに乗り込んだ。

「城西中学校までお願いします」

運転手に声をかけ女は深く腰を据えた。

少年は、扉の入り口に立ち、何かを引っ張っている。

「恭ちゃんてば！ もうライブ始まつてるから、今から行っても、クラスの人にはそんなに会わないよ」

と言つて、さらに細腕に力を込めた。

その小柄な少年は、厚ぼったい前髪で目元は隠れ、頬はそばかすで覆われていた。

「やだよ、良太君、俺」

と言つた声の主は扉の中にいて、ここから先には出まいと、冊子に手をかけている。

中にいる少年の方は体格もふつくらしており、身長もかなり高いので、小柄な少年の努力は、焼け石に水といった具合である。

「良太君の家に行くつて言つたから出てきたのに、俺だまされるところだった」

「だからこうして、打ち明けてるんでしょ」

小柄な少年はそれでも、負けじと引っ張っている。

「とにかく、俺いかない」

「山中さんが参加してるつて言つても？」

体格の良い少年は力を緩めた。その瞬間、小柄な少年の腕はすべり、鉢植えを倒しながら転んだ。背中にある手すりから下を覗いて、

「いったあ」

「ごめん……」

「あぶないよ！ これでもう、行くしかなかったね」

扉の下はおよそ、十メートルの高さがあり、落ちると笑い事ではすまない。

体格の良い少年が小柄な少年に手を貸す。

「大丈夫だよ、僕が保証する。チケットもほら！」

そう言つて、微笑すると、体格の良い少年はあいづちを打った。

壊れかけの街灯が点滅し、夜の校舎をぼんやりと照らしている。  
グラウンドの端にはテニスコートがあつて、ネットが張られていた。

女は体を抱くようにして、歩いている。

「懐かしいな、でもむなしい……」

辺りを見渡すと、道路を挟んで、テニスコートから反対の方向にある公民館から明かりがもれていた。

「こんな建物あつたかな？」

と、女は言つて歩き出した。

すると入り口からサンタクロースの姿の少女が出てきて、踊り場から階下を、首を左右に振つて覗いている。

そこで、女を見つけると、

「あの　あの！　その人、ここでライブしてるんですけど、見に来ませんか？」

女は訝しそうに、階段上の踊り場を見つめて、

「その人つて私だよな？」

と、言つて、女はその場所まで歩み寄る。

「そうですよ、今なら特別にただで！」

と言つて、サンタクロースの格好をした、少女は笑った。

「ちよつと待つてちよつと待つて、うーん、ライブ……ライブか」  
女が悩んでいると、

「あの、失礼ですけどどこかで、会つたことありませんか？」

と少女は言つた。

「うまいなあ。久しぶりに、こっちに帰つてきたから、それはないかな」

「わー、どうりでカッコイイ」

「まあ暇だし、いいか……高校生？」

「チュウニです。わーい、それじゃ、中に入つてきてください」

「若いねえ」

と言つて女は階段を上る。中からは何やら騒がしい音が聞こえ、

それが怒鳴り声だとわかると女は、後悔したのだった。

「所詮こんなものか」

少年はそう小声で毒づいて、ステージを見下ろした。  
公民館の中は学生でこった返していた。

「えーと何だっけ隆くんだったけ？　ちよっとライブ中にみんなごめんな」

ベースを抱えた男は、観客に一度謝り、少年の肩に手を回した。  
男の金髪の頭頂部は黒く、不健康な顔立ちだった。

少年は嫌悪感を隠すこともなく、中性的な顔立ちをゆがめた。

「次の曲それで行くから」

そう言ってベースの男は、楽譜をスタンドに置いた。

「俺、この曲知りませんし、楽譜読めません」

少年は一通り目を通して言ってから、ベースの男から視線を外して観客席を見つめ、

「松尾！　これっきりだ！」

と、続けた。

「そんなこと言わずにさ　、学生でこの曲知らない人いないよ。  
後半、オリジナルの曲持ってくるんだけど、時間余りそうでさ」

ベースの男は、マイクを避けるように小声で言った。

「だから知らないから、歌えませんか……」

少年はそう言って、意味のないやりとりに嫌気がさしたのか、ステージの右端にぼつねんと立つ、ギターを抱えた少女の方を向いた。  
「ねえ、隆君だったよね、聞いてる？」

「松尾君にヘルプ頼んで、君に来てもらったのに使えないよね……」  
少年はギターを持つ少女を、睨みつけるように見つめ、少女もそれに答えて驚いたように睨み返してくる。

少女はボブカットに、エースのランプ柄のティシャツを着込み、  
チェックのミニスカートに、色落ちしている先がとがった革のブーツを履いている。愛くるしい童顔な顔つきで目尻はつり上がり、身



長は相当低かった。

始まらないライブに、次第に観客たちの話し声が大きくなる。

「わからなくてもいいからさ、適当に合わせてよ。開始早々これじゃ遅れてくるヴォーカルに、申し訳ないでしょ」

少年はベースの男を見上げた。

「適当に歌え？」

少年はそう言って、目の前にあった楽譜スタンドを、勢いよくはねのけた。

「ふざけんなよ！ こっちは、やりたくもねえのに、松尾だから頼まれてやってる。はあ？ はやりの歌のコピーやるくらいなら、バンドなんか組むんじゃねえ、義理で二千元も払えるか！ 五百円の価値もねえ！」

観客席、最前列に立っていた、面長の少年が額に手を置いた。

ベースの男は数秒惚けたしていたが、すぐに険しい顔つきに変わり、少年の襟首をつかんだ。

「テメエ、なにさまのつもりだよ！ ただのすけつとだろ！」  
ベースの男はそう怒鳴った。

「それはこっちの台詞だよ。おまえがなにさまかってんだよ！」

二人は押し合い、床にあったコード類が散らばった。

ドラムの神経質そうな男は、ドラムスローンからやっと立ち上がり、喧嘩の仲裁に入った。

「ガキがバンドを知らないくせに」

「おいみんな！ 特にこの男目当てで来てる女子帰れ！ ガキとか高校生に言ってるぞアリエネエ！」

少年はベースの男に殴られステージの端に追いやられる。

そのとき、黒山の人だかりを避けるようにして、ライブなんて眼中にないというように、顔をステージから背けて立つ女に目がとまった。

（こいつも俺と同じか……こうなったら何もかも壊れてしまえ）

少年はマイクを引っつかみ、

「そのギンガムチェックの人！」

公民館の隅にいるその女を指さして、  
女は（？）自らを指さした。

「そう、あなた、センスというか雰囲気がいい。あなたにこの曲を  
ささげるぜ！ メリークリスマス！」

と、少年は言った。

会場からはブーイングの荒らしが起きた。

「おまえもう帰れよ、クソガキが！」

と、ベースの男は肉薄した。

ライブは手がつけれられないような、状態になった。

するとそのとき、ステージのスピーカーから、大音量でギターの  
音が刺すように走り抜けた。

ギターを抱えた少女は目を閉じ、弦を、叩くようにはじいている。  
始めはただの爆音で、馬のいなくような音が、次第に整ってき  
た。

少女は高速で指を操る。

観客は吸い込まれるように、彼女を注目した。

徐々に演奏はフェードアウトし、マイクを持つ少年は、ギターを  
ひいている少女へ、視線で合図を送ると、マイクを抱え込むように  
持った。

ベースの男は釈然としない様子だったが、これを期に自分の位置  
に戻っていった。

少年はまるで何かに魅入られたように、頭を揺らし歌い出した。

ギターはコードを変調させ、少年の歌声と重なり合った。

ドラムとベースも、たどたどしくはあるが、ついてくる。

それらは一体となって、少年の力強くて芯が通った歌声に、導か  
れていった。

いつのまにか、観客は静まり返り聴き入っていた。

少年は掌を上にして水平に腕を上げ、半拍置いてそれを下げた。  
その合図をきっかけに音が収束する。

少年はゆつくりと目を開けた、両目は涙で濡れていた。

無言でマイクを置いて、ステージを降りて歩き出す。

パチパチと拍手が起き、一気に爆発した。

少年が扉の取っ手に手をかけたとき、

「ちよつと隆君!？」

と、ベース男の声が場内に響いたが少年は、無視をし扉を開けた。モッズコートのポケットに手をつ込んで、階段を下りる。

ステージのちょうど真下に、駐輪場があつて、そこにバイクはあった。

少年は、駐輪場に止めてあるバイクに、腰を掛けハンドルロックを外した。

流線型のボディ、戦闘機のようなスタイルでウインカーはついていない。スクーターのような形をしているが、ナンバーからして原付きではないことは伺えた。

キックペダルを踏み込む。それを数回繰り返すがエンジンはかからない。

「おい、がんばれよ!」

少年はバイクに向かって言った。

「かわいいバイク」

少年が振り返ると、ギンガムチェックの服を着た女がそこにはいた。

「あ、さっきの女」

少年はそう言つて、バイクのエンジンをかけるのをあきらめ、シートに腰をかけ女と向き合った。

「歌うまいよね。題名聞かせて!」

「題名つて言つてもな……さっきできた曲だし……勝手につけていいよ」

「え? 即興で全部やったの? ウソだ! ギターの子とすごいコラボしてたし」

「ギターね、あれは特別。でも、さっき浮かんだメロディだし、そ

う、あんた見て作ったから、何かのイメージにはなってるかもな」  
女は少年の肩をつかむと揺さぶった。

「お願いだから違うって言って、実は邦題があったりするんでしょ  
う？」

「アリエネエこの人しつこいよ、何、何、これってナンパ？」

と、少年は笑いながら言った。

「声をかけたのはそっちが先！」

それから、女は妙に真剣な表情をして手を離れた。

「俺は隆そっちは？」

「わたしは真紀」

「二人ともありふれた名前だな」

少年はシートから腰を上げると、全体重をかけるようにキックペ  
ダルを踏んだ。

白煙がマフラーから出て、パンパンと音が響く。

そのとき、階段の下に数人が現れた。中でも、サンタクロース姿  
の少女は腕を組んで、バイクにまたがる少年を見つめている。

少年は慌ててジョッキーマヘルメットを被ると、

「ヘルメット貸して！」

女も慌ててそう言った。

モッズコートのアスナーを上げると、少年はバイクを走らせた。  
鉄骨で覆われた低い天井に、ハチの羽音のようなマフラー音が響  
いた。

アスファルトを滑るように進む。

雪が二人の肌を叩いた。

先頭に立つ面長の少年は、バイクにまたがる二人を見て、額に手  
を置いた。

サンタクロースの姿の少女は、険しい目つきで睨んでいる。

少年はニヤリと笑ってアクセルを回した。

## 素敵な片思い 1

羽柴良太は大声で、

「恭ちゃん起きて！ 新学期だよ！」

と、言った。

橋本恭介は耳元で聞こえる、騒音から逃れようと、布団の中に潜った。

「今日から学校行くて、約束したよね」

良太は恭介の肩を揺さぶる。

「俺、やっぱり行かない……」

「恭ちゃんは、嘘をついたりする人じゃないよね」

と、言つて、良太は布団をはがした。

「わかったから……」

「恭ちゃんが行かないなら、僕も学校休む」

恭介はやっと起き上がった。目をこすりながら、

「用意するから、下回つて」

と、恭介は言つて、部屋を出た。

橋本家は二階建てで、この部屋から出てすぐ右側には、外へと降りる勝手口があった。

良太はいつも勝手口から、この部屋まできている。

恭介の両親は引きこもりな息子を思つて、良太に定期的に電話をし、外に連れ出してほしいと頼むが、良太は言われなくとも、そうするつもりだった。

外で待っていると、恭介は出てきた。眩しそうにしている。

身長はとても高く、肥満とはいかなくとも肥満の子供くらいには太っている。

これといって顔の特徴はないが、太い眉が柔らかい印象に不釣り合いである。

良太は恭介に比べると身長の高さは際立っている。

前髪は顔を隠し、陰気な印象を与えている。

「恭ちゃん、おはよう」

「お、おはよう良太君……」

それから二人は自転車で学校へと向かった。

高校は市内の外れにあつて、橋本家から自転車で二十分程度の距離だった。

ここ、鶴左市は海の幸、山の幸が豊富で、日本全国でも有数のリアス式海岸を備えている。県からは南東部に位置し、人口はおよそ七万人。そんな九州の田舎である。

良太はペダルを踏みながら思案した。

恭ちゃんをこれから、毎日学校に通わせるには、僕はどうすればいいんだろう……何か良い方法ないかな？ やっぱりあれしかないかな……でも、

半ば答えが出ているが、躊躇っているのだろう。

そんな良太を知ってか知らずか、恭介の表情は、学校に近づくにつれ強張っていく。

「大丈夫だって、僕らそんな目立つ存在じゃないし、案外みんな気にしないと思う」

「……」

二人は並走しながら話している。

「それよりさ、今期アニメって、できくないよね……」

良太は恭介の緊張を、和らげようとしているが、効力はないようだ。

校門に差し掛かる頃には、恭介の緊張はピークに、達しようとしていた。

「俺、やっぱり帰る……」

恭介はブレーキをかけて、止まると言った。

「駄目だよ！」

慌てて良太も止まる。

行き交う生徒は、そんな二人を見て冷笑している。

そのとき、二人の横を、ギターを背負った女子生徒が通り過ぎていった。

身長は低く、まるでギターに押し潰されそうである。

良太は自転車を、恭介の横につけて、

「このままでいいの？」

と、ささやいた。

恭介は顔をしかめ、耐えるように、駐輪場へ向かった。

良太も後を追いかけた。

二人は三階の２Ｆと書かれている、教室に入った。

恭介の足取りは、教室に入るまで重かった。

二人が扉を開けた瞬間、視線が集まったが、それも長くは続かず、意外と、あっさりとしたものだった。ただ、クラスの生徒からは、疎外されている感じではあった。

良太の席は窓際が一番後ろの席で、恭介はその前だった。

恭介はおずおずと席に腰を下ろすと顔を机に向けた。

「大丈夫？」

と、良太は声をかけたが、恭介は黙っていた。

しばらくすると担任がやってきて、ホームルームが始まった。

始業式の間、良太はクリスマスライブを思い出していた。

きっかけは朝方見かけた、山中椿だった。椿はライブ中ギターを担当していて、会場の騒ぎを収めた張本人だ。あのギター演奏がなければ、ライブは中断していたのかもしれない。

バンドをすれば、前の恭ちゃんに戻るかもしれない。

それほど、あの日のライブは、二人にとって刺激的だったのだ。ヴォーカルの人って確か、A組の人だったかな……あのとき正式なメンバーじゃない、みたいなこと言ってたし……。

とにかく良太は声をかけて、バンドに誘ってみようと考えた。

学校が終わると良太は、恭介に先に帰宅してもらい、校門近くで

A組の彼を待った。

しばらくすると彼はやってきた。

話しかけようとしているうちに、尾行するような形になった。

市民体育館で右に折れて、良太も慌てて追った。

距離を縮めた。

彼はバイクにまたがっていた。

「あの」

良太はおごそかに言った。

「クリスマスライブで、ヴォーカルをしましたよね。すごく歌上手なんですね。僕、F組の羽柴良太と言います」

「で　？　何？」

「それでその……バンドのメンバー募集してまして、あの……お名前聞いてもよろしいですか？」

「バンド、おまえが……？　俺は隆な」

「それでは改めてお願いします、隆君……一緒にやってくれませんか」

「わるい、アリエネエ……おまえ本気で言ってるそれ？　それより俺がバイクで、学校通学してること、ちくつたらゆるさんぞ」

と、言っていてしまった。

隆の突き放すような態度に、最後は何も言えない良太だった。

「間が悪かったのかな……」

良太はあきらめて、帰宅することにした。

机の棚や壁にはアニメグッズ、フィギュアや、ポスターなどがあった。

整理された室内だったがそれら物が圧迫している。

良太は帰宅すると部屋にすぐこもり、パソコンの電源を入れて、ネットサーフィンを始めた。

ブラウザを起動させ、検索単語を入力する。「歌手」や「バンド」といった文字が並んでいくディスプレイを、真剣な眼差しで追いか



けている。

「なるほど、バンドをするにしても、僕はどんな楽器を演奏するんだろう」

最も大事なことを、忘れていた良太であった。

「それに、恭ちゃんは賛成してくれるの？」

ネガティブな思考に押され、溜め息がこぼれた。

僕は周りが見えてないって、昔の恭ちゃんにしかられてた……。

ともかく、普段アニメソングを聴いて過ごしているので、流行曲でも聴いてみようとして、「JPOP」と動画サイトで検索をかけた。

一番上にあつた動画を、良太はクリックした。

すると、女性アーティストの静止画が現れ、音楽が流れ出した。

クリスマスソングが流れている。

良太は曲を聴きながら、コメント欄に目がいく。

「だれだ？ SAYAの曲無断でアップしてるやつは、やめろ！」

「貴重な画像ネットに流すな」

「いまどきアニソンの曲を、ネットに流して注意する親切なやつがいるとはな」

「何がアニソンだ、おまえらがいるから、ジャケットの表面にキモイ絵が入ったんだよ。SAYAの画像は貴重なんだよ！」

コメント欄には罵詈雑言が飛び交い、収拾がつかないような状態になっていた。

それから良太は気になって、匿名掲示板で同様の記事を探したが、スレッドタイトルに「二次元と三次元の戦い」などと題しているものまである。

しばらく記事を見ている限りでは、SAYAという女性シンガーの、新曲ジャケットの表面に、アニメの絵を使っていた、ということらしい。

これだけなら何を大げさに、と感じるかもしれないが、そのSAYAというシンガーは日本で最も認知度が高い歌手で、そして音楽活動以外行っていない。テレビにもラジオにも雑誌にもでない、し

たがってファンはCDについている、ブックレットからしか彼女の姿を見ることはできない。つまりファンは、アルバムジャケットのアニメ挿し絵事態、気に入らないのである。

良太が掲示板を見ていると、祖母の夕食を呼ぶ声が聞こえたので、良太は部屋を出た。

夕食後しばらく、祖母と祖父とでとりとめもない団欒があった。

良太は恭介と同じ学区内になるために、両親とは離れて暮らしていた。

元来おばあちゃん子だった良太は、祖父母と暮らしていることに、恥ずかしいや煩わしいといった、若者特有の感情は抱いていなかった。

夕食後、入浴を済ませ再びパソコンの前に座って、バンドのことを調べていった。

とにかく 隆君にヴォーカルを頼むにしても……最低でも後一人、メンバーが足りないよね……ギターとベースとドラム、僕はどんな楽器が向いてるんだろう……。

「よし、うだうだ考えてても何も始まらないよね」

と、良太は言ってキーボードをカタカタと叩いた。

「バンドメンバー募集します。メンバーになりたい方は僕、羽柴良太まで連絡してください。090-\*\*\*\*\*」

それから文字をプリントアウトし、ブレザーのポケットにしまくと、ベットに横になった。

## 素敵な片思い 2

担任から掲示板利用の許可は下りたが、バンドメンバー募集という紙面を見て、以外そうに眉をひそめて言われたのだ。

「羽柴がバンドねえ……」

不謹慎だと思ったのか、担任は咳払いでごまかしていた。

良太は今日も恭介を、学校まで登校させることに苦労したのだ。担任が教室から出て行き、どつと疲れたように席に戻り腰を下ろした。

「良太君どうしたの？」

と、恭介は聞いてきたが、

「何でもないよ」

と、バンドの件を伏せる良太だった。

恭介は案外平気そうな表情をしているが、良太はこれがずっと続くとは思っていないのだろう。些細なきっかけで登校拒否に陥るものだ。

だがしかし、原因にいたっては星の数ほどありそうだが……。

午前の授業も終わり、良太は二階に下りて、職員室横の掲示板に、昨日のうちに作成したメンバー募集の紙切れを張った。

恭介はそんな良太を見て言った。

「良太君バンドするの？」

「まだやることあるんだ」

良太は職員室前で、大木のように突っ立っている、恭介を置いて先に行く。恭介も無言で後を追った。

「早くしないと、お弁当食べる時間がなくなっちゃうね。僕、A組に用があるから、恭ちゃんは先に食べていいよ」

と、良太は言って階段を上がっている。

A組の前に到着し、良太はガラス戸から中を見渡している。そして隆を見つけると、やおら入室したのだ。

恭介は窓際に所在なげに立っている。

「あの、昨日はいきなりでした、ごめんなさい。今、大丈夫ですか？」

と、良太は言ったが、隆は歯牙にもかけていない。

机二つ並べた隆の向かい側で、弁当を食べている松尾淳一は、チラチラと隆を伺っているが……。

「僕たちのバンドの、ヴォーカルになつてくれませんか？ 一人足りてませんが……先ほど職員室に、張り紙をしてきたところです」

隆は顎を突き出し、はしを置いてから言った。

「俺、飯くってんだけど……何おまえ？ 昨日言つたるバンドはしねえって」

「はい、でも……昨日は間が悪かったのかなって思ひまして……」

「今はどうだ？」

「とても悪いみたいです……」

「で、一応聞くが、おまえの他に誰がやんの？ おまえ楽器できんの？」

「えっと……僕の他には……」

そこで良太は、廊下に立っている恭介を指さして、

「恭ちゃんと、僕と……あの、言いくいんですけど、楽器はまだ、持ってます」

そこで、松尾がばつが悪そうに額に手を置いた。

「アリエネエ！ おまえおちよくってる？ 楽器もいいけど、見た目どうにかしろよな、なんだよその前髪、素材悪くねえんだから、努力くらいしろ、話はそれからだ！」

「はあ……見た目ですか……」

「勘違いすんなよ、俺は松尾みたいに偏見ないからな、とにかくバンドはやらない。じゃ、そういういことで」

隆はそう言つて片手をひらひらと上げた。

良太は仕方なく、引き下がり教室を出て行く。

そのとき、昼休みが終わりを告げるチャイムが鳴った。

「ごめん恭ちゃん」

良太は廊下に出て恭介に、拝むように謝った。

学校帰り恭介の家に、良太は立ち寄った。

恭介は言葉少ない良太を心配していたが、寡黙な性格から気の利いたことは言えなかった。

良太は椅子の背もたれを逆にして座っている。

恭介はベットに腰掛けていた。

「ねえ、僕たちってさ、外見とか気にしたことなかったよね……髪型とか、服装とか、今まで普通にしてたつもりだったけど、普通の基準を知らない僕は、やっぱりただのオタクなのかな」

恭介は静かに聞いている。

「なんだか空回りしてる。ごめんね恭ちゃん愚痴って……」

「いいよ、俺気にしないから」

良太はしばらく目を瞑り黙り込んでいたが、家庭用ゲーム機を取り出して電源をつけて、

「だって、おもしろいもんね。アニメやゲームって」

と言って微笑した。

恭介は隣に座り直してコントローラーを握った。

それから二人はしばらくゲームに没頭した。

「やったねブイ」

ゲーム画面上では良太のキャラクターが屹立し、恭介のキャラクターが倒れ込んでいる。

良太はゲームで勝ったのだが、現実でもポーズを決めている。そのブイサインはちょっといや、かなりぶっかこうである。

「恭ちゃん、明日はちゃんと起きてね」

恭介は黙ってうなずいた。

そろそろ夕食時でもあるので、良太はきりのいいところでゲームを終わらせ、ゲーム機を直した。

「また明日来るよ」

「うん……」

空は茜色に染まっている。

良太を勝手口まで送る恭介は、おずおずと言った。

「良太くん、バンド本気をするの？」

「わからない、恭ちゃんはどう思う？」

恭介が質問を質問で返されて、答えに窮していると、

「中学の頃はいじめられていつも恭ちゃんに助けてもらったでしょう。でも高校生になって、恭ちゃんの欠席が増えて、どんどん性格が変わって……昔の恭ちゃんは、とても静かだったけど、どっしりしてたと思う。だからこのままじゃいけないって、でも僕何もできなくて……あのときチケット押し売りされてライブいってさ、隆君の歌声を聴いたときにこれしかないって感じたんだ。だから僕決めたよ、バンドをするって！ 今度は僕が恭ちゃんを助ける番だね」

と、良太は言っただけで肩を下げた。

「バンドということを思いついたのは始業式の前日なんだよね」

「あのおれ」

と、恭介が言ったがそのときにはもう、良太は踵を返していた。

## いちこの気持ち

山中椿は、夢見後心地だった。

ふらふらする足取りで、自室にある冷蔵庫を開けると、月とうさが描かれている箱の中からプリンを取り出した。プリンの他にも和菓子や洋菓子が幾つかあった。

机の横には鏡台があつて、鏡と向かい合うようにプリンを食している。むしゃむしゃと。

時折体が震えている。それは口を動かす合間に左手で、エアギタ―さながら指を動かしているからである。

ふだん物事を深く捕らえる傾向にある椿だが、朝のいつときはこーやって思考が奪われている。これは山中椿が停止している時間であつて、決して素ではない。

山中椿の親友である、隆がこの痴態を見れば、ニヤリとすることだろう。

今は、故合つて二人は口を聞いていない。

食べ終わる頃には意識も目覚めており、椿はまばたきをする、机に向かった。

「私の足長おじさんへ」

という出だしで手紙を書き出したのだ。

手紙を書き終えると、丁寧に三つ折りにして、かわいらしい柄の封筒に収めた。

それをバッグに入れてから、椿は扉を開けた。

台所にはテーブルに突っ伏した母が、椿に気づいて、

「椿ちゃんおはよう、母さんまた、負けちゃった」

と、言った。

母は、上品そうな顔立ちではあるが、所々白髪があつてやつれて見えた。

椿はそんな母を無視し、洗面台に向かい歯磨きをした。

およそ一年前、椿は家庭内別居を始めた。

今では母子が、話することすら珍しいのである。

ギャンブル依存症の母を何とか改心させようとしていた椿も、母が自分の机の中をあさっている姿を見て匙を投げた。

椿は孤独を知っていた。

どうしても気持ちが落ち込みやりきれない日は、ただ部屋に閉じこもりがむしゃらにギターをひいた。そうすると自然に落ち着くのだ。

物心ついたときにはギターをさわっていた。

雑然とした物置に、幼い椿が初めて演奏した、ギターがあつた。

椿が幼いころ、両親は離婚した。

父が最後に残したものは、そのクラシックギターだった。

決して開かれることのないその部屋を通り過ぎるとき、椿はほこりの被ったギター、その一角を見入ってしまうのだ。

用意が終わると、椿は家を出た。その間、母を見ようとしなかった。

背には体と不釣り合いな、ギターを背負っていた。

県営住宅から学校まで、徒歩で十分程の距離で、椿はその日の気分によって自転車通学と徒歩通学と変えていた。

道路を挟んでなかえ川が横たわり、橋を越えて遊歩道を通って道路を右に折れると校門から近い交差点が見えてくる。

教室に着くまで誰一人挨拶を交わすことなく、席についてからも松尾一人がすれ違いざまに、「おはよっす！」と声をかけたくらいだった。

ホームルームが終わると担任に呼ばれた。

それは保護者の承諾が必要な、提出物が出ていないせいだった。

担任の村山は、

「昼休み先生の所に来るように」と、言った。



午前の授業が終わり、椿は担任の言いつけ通りに、職員室に向かった。

廊下を歩いていると、掲示板に目が留まった。  
バンドメンバー募集という掲示物だった。

クリスマスライブの後、椿はそれまでバンドの練習、ギターの上達のために何とか耐えてきた、メンバーの質の悪さ、いい加減さに我慢できず、あのバンドを抜けたのだ。

そこでこのメンバー募集は渡りに船だった。

同じ学校の人なら何かと便利かもしれない。

椿は携帯のメモリーに、羽柴良太の番号を記憶させた。

溜め息をついてから、良太は首を横に振った。

「今日も駄目だった……隆君たちと僕たちとじゃ、何だか住んでる世界が、違みたいだよ……」

良太は恭介をうらめしそうに見つめて言った。

「世界……」

「今のままじゃ駄目だってそう思ったんだよこんなオタク！」

「バンドと関係」

「意地になってきたかもしれない。けどさ、ダサイよりカッコイイ方がいいよね？ もてないより、もてるほうがいいよね……僕たちこれじゃ駄目だ！」

良太は話しながら興奮している。

「ライブのときの隆君、恭ちゃんも見たでしょう。あのときの歌を聴いて、僕の中に何かが駆け巡った……そんな気がするんだ」

「俺、音楽詳しくないけど、良太君の言ってることわかる」

「ごめんね、八つ当たりして」

良太はそう言って教室へと入っていった。

恭介も後に続いた。

二人が弁当を広げているとき、良太の携帯電話が鳴った。

恭介は良太の表情が、ころころと変わるさまを見逃さなかった。

電話が終わると良太は喜び勇んで言った。

「恭ちゃん、バンドの後一人が決まったかも！」

待ち合わせ場所は、学校からも近い、遊歩道沿いの噴水のある公園だった。

二人は落ち着きなく辺りを見回している。

学校が終わると、恭介を引っ張るように連れてきた良太だった。

恭介は芝の上に立ち空を眺めている。快晴である。

良太はにこにこしている。

二人が立っている後ろから、彼女はやってきた。

「もしかして、あなたが羽柴良太？」

良太が振り返り、恭介も振り返った。

「はい。僕が羽柴良太です」

「じゃあ、あなたが募集かけのたのね、あたしは山中椿」

恭介は振り返ってすぐに、ロボットののような動きでぎこちなく固まった。

「はい、山中さんですよ。A組の」

「知ってるんなら話は早い。あたしは」

後ろのギターを指さして、

「ギター希望かな、そっちは？」

「えっと……非常に言いにくいんですけど……楽器はまだ持ってません……」

良太はそう言って、引きつった顔で恭介を伺った。

まさか、あの山中椿が来るなんて、思っても見なかったのである。

それは恭介も同様だろう。

「え？ 誰かに貸したとか？ 壊れたとか？」

「いえ、全くの初心者です」

椿は目をすつと細め、腕を組んだ。

「あなたたちからかかってるの？ 募集じゃなくて、仲良くバンドしましょうでしょうそれは！」

「そうですね……」

良太はたじたじである。恭介は助けてくれそうもない。

「じゃあ、あなたたち、見た目通りのただの凸凹コンビのオタクじゃない」

「だから隆君も、とりあつてくれななんだね」

ぼそりと良太が言った一言に椿は反応した。

「何、あなたたちって隆の知り合い？」

「知り合いというか、ヴォーカルになつてもらいたくて……毎日誘つてるんですけど、断られ続けてて、見た目からなおしてこい、話はそれからだつて言われました」

「隆がそう言ったのね！」

椿は腕を組んだまま、勢いよく言った。

「あの、本当にご迷惑かけました……僕たち出直してきます」

良太がそう言うと、

「待ちなさい！ まだ話は終わってない、凸凹コンビ！」

二人は肩を震わせた。

「デブは遊歩道を走る！ チビはあたしについてくる！」

恭介は、ぎこちなく首を回し一度椿を見てから、

「はいっ！」

と言つて、走り出した。

「あの、どこにいくんですか？」

と、良太は言ったが聞き入れてもらえず、先に歩き出した椿の後を追った。

椿は住宅に寄つて、自転車に乗り換えた。

徒歩で付いてきていた良太は、それからは走りに変わった。

国道沿いにいって、二人はコスモスタウンフリーモール、市内の中心部へと入ったのだが言わずもがな、良太は汗だくである。

暖房の効いたきれいな室内、奥にはソファがあつて、入り口からすぐ近くにはカウンターがあつた。

椿は良太を無理矢理室内へと引つ張りこんでから、カウンターに立つ男に、

「ゆかりちゃんいる？」

と言った。

「椿ちゃん、今日はどうする」

と、男は言いつつも、顔だけ振り返り奥にいる女性を見た。それに気づいた、女性は椿に向かって手を振って合図をする。

「うーん、あたしじゃないんだ。今日はこいつの髪を、どうにかしてほしいのよ」

生まれて初めての美容院で、良太は緊張している。

「どんなふうにする？」

男は良太の厚ぼったい髪を見て言った。

「とにかく、かつこよく 無理だわ。かわいくしてくれれば」

男が良太の髪をかき上げると、

「あ、ごめ、眉もしてあげて、サービスで」

と、椿は言った。

「うちはそんなサービスやってないんだけどな、それじゃ少し待っててね」

男はそう言つて、奥へいった。

「良太、あたしこれから用事あるから、帰らなきゃだけど、逃げたりしたら、メンバーになつてあげないわよ」

椿は、入り口に手をかけ振り返りながら言った。

「え、じゃ、じゃあ！ 一緒にやつてくれるんですね！」

と、良太が言った。

「まあ、あなたたち次第だわ、隆を引き入れるのは難しいわよ」

「僕、がんばりますから！」

「それじゃあね、走ってるやつの方もよろしく」

椿は出ていった。

恭介は走っていた。体は汗まみれになり、呼吸も荒くなるが足を

止めなかった。

今まで、ただ見ていただけの存在の山中樁と、話をする事ができたのだ。

それがかなった今、走ること何の苦労があるというのだろう。

一歩一歩進むたびに、思考がくつきりと浮かび上がってくる。

今までの怠惰な自分を呪った。

こんなことなら、痩せておくんだった。今さら、そう思っても遅いが、それでも完全にあきらめていた事柄に、ほんの少しだけ希望が見えた。

夕焼け色に染まる公園　良太君は何をしているんだろう……。

恭介が遊歩道の入り口を迂回しようとし、顔を上げたそのとき、人がいたので、避けようと体を動かして走る。

ちようど逆光になり辺りがよく見えない。

「恭ちゃん！」

驚いて恭介は立ち止まり振り返る。

そこには良太が立っていた。

まゆ毛を細く整え、長すぎた前髪を切り、短く無造作にまとめたその愛らしい容姿は、童顔な良太にとってもよく似合っていて、同一人物とは思えなかった。

「良太君？」

「そうだよ、わからなかった？」

恭介は傍らにいくとまじまじと見た。

「俺、驚いた。本当に良太君だ」

「終わって鏡を見たとき、僕もびっくりだよ、ねえ似合ってるかな？」

「う、うん、すごくそのいいと思う俺」

良太はにつこり笑うとブイサインを作って

「恭ちゃんやったね、ブイ」

以前と同じオタク的動作なのだが、良太の外見が変わったことにより、とてもよくにあった。

恭介は口をポカンと開けた。

「あのね、恭ちゃんもバンド一緒にしてくれるよね。山中さん入ってくれるって」

恭介は良太をじっと見つめて、

「俺も……。やりたい」

と、言った。

「ほんとのほんとに？」

良太はつぶやくように言った。

「俺もやる！」

と、違和感のある大声で恭介は答えた。

「よかった……撲う……恭ちゃんがいやだっていったらもう……」

それから二人は帰るべく並んで歩き出したわけだが、どこことなく恭介はよそよそしかった。

## B e m y b a b y

明け方、携帯電話が鳴った。二度、三度と呼び出し音が続く。隆は寝惚けて携帯を投げつけ、壁に当たる。

いまどきの高校生は着信音を、デフォルトの状態で使う輩は少ない。

そのためか、ピピピというやかましい音は妙に家中に響いた。今日こそは無視をしてやる。

隆は、「ああ」と声を漏らした。

こんなやりとりがここ数日続いていた。毎日決まったような時間に、こうやって起こされてしまうのである。

隆は携帯電話を取って通話ボタンを押した。

「真紀、おまえさ、今何時か知ってる？」  
と、言った。

「どうしてわたしってわかったの？」

受話器からは、真紀の声が返ってきた。

「おまえしかないだろ！　じゃそういうことで」

「ちよっと待ってちよっと待って」

こうやって結局隆は眠れぬまま、学校へと行くのである。

隆が、切ろうとするたびに、ちよっと待ってちよっと待ってと繰り返すのだ。

ようやく話も終わるころ真紀は、

「今日も学校よね、いつてらっしゃい」

と、まるで自分がモーニングコールでも、しているように、しめくくるのだ。

携帯電話を鞆にしまうと、アンティークなレコードプレイヤーに、針を落として音楽を流す。六十年代のロックが流れている。その間、着替えを終わらせると、隆は居間に出た。

「お兄ちゃん、誰といつも話よるん？」

と、妹の恵は朝食を食べながら言った。

二つに結んだ髪の手が揺れている。

「別にだれでもいいだろうが、おまえに関係ねえ」

「もしかしてさ、ライブのとき二人で逃げた、女の人じゃないん？」

隆も座り、朝食を食べる。

「メグな、受け付けしよったやろ、あの人誘った張本人なんよ」

「アリエネエおまえか、一般人引き入れたやつは」

「あの日、椿さんと仲直りした？」

「いや……」

妹は肩を落とした。

「三人でせっかく計画練ったのに……おにいちゃんのバカ」

と、言つて、恵は立ち上がった。

「なんだ計画つて、俺聞いてねえよ」

「知らないのは、おにいちゃんだけ」

それから妹は、浴室の方へ歯磨きをしに向かった。

隆は（？）で朝食を食べ上げると自室に戻った。

しばらく音楽に耳をかたむけていた。

すると用意を終えた恵がやってきて、

「お母さん夜勤明けで、今寝とるけん」

と言つて、恵はどたばたと足音を立て学校へ向かった。

隆はゆっくりと浴室に続く扉を開けると、泥棒のような足取りで

畳みを踏んだ。

奥には、母が寝ているのが見える。

壁際に乱雑に積み上げられていた、漫画本が揺れて落ちた。

すると、母はぬつと上半身だけ起こして、

「バタバタうるせえ！」

と、怒鳴つて隣にあった枕を投げつけた。

隆は思わず悲鳴をあげそうになったが、何とかこらえた。

洗面台についたときには、おもわず溜め息がもれた。



「あぶねえ、起こしたら殺される」

と、言って、歯磨きを始めた。

顔を洗ってタオルで拭く。

「計画って何だよ」

自室に戻って用意を終えると玄関に向かった。

隆はバイクのエンジンをかけると、道路に走り出た。

形状はスクーターのようだが、イタリア製のバイクで排気量は百五十ccである。

学校では、原動機付き自転車の取得は校則で認められているが、自動二輪の免許は校則違反に当たる。

しかし、外見がスクーターにしか見えないことと、生徒の自由を重んじる校風、白紙の生徒手帳とこの学校では呼ばれているが基本的には校則が、あつてないような状態になっている。

そのまま学校まで乗っていくことはできないので、市民体育館にバイクを止めて、そこから徒歩で学校に向かった。

ちょうど交差点で松尾淳一が、にやにやと笑いながら隆に話しかけた。太い眉が印象的で横にも縦にも身体は大きい。

「よう、眠そうな顔してるなあ」

と、肩を回してきたので、

「暑苦しいぞ、おっさん」

と、隆がやり返す。

「俺のどこがおっさんだ？」

信号が青に変わり歩き出す。

「すべてが」

「じゃあおまえは、オカ」

「それ以上言ったらゆるさん！」

ちょうど、校門が見えてきて、横断歩道を二人は渡っている。

そのとき、山中椿がギターを背負って歩いているのが二人の視界に入った。

松尾は、

「今日も一匹狼ですか、山中はほんとにクールだぜ、ま、そんな俺はアウトローだが」

と、椿を見て言った。

「おまえのどこがアウトローだよ」

チャイムが鳴ったので二人は急いで教室に向かった。

ホームルームが終わると、隆は担任の村山の下へいった。

「先生ビデオまだ？」

「悪いな。先生まだ、ダビングできてない。もうちょっと待て」

「ま、大事にしてくれるんなら、いつでもいいけど」

「しかし、よくあったな、何年も前の特番の映像」

「母さんが残してくれてたから」

「そうか、先生悪いこと聞いた」

「いや、いいよ。それより、どうビデオ？」

「凄いなあ、まさにあのバンドの音楽だったよ。死して尚語り継がれる」

「そうそう、で、テープの音源で音悪い部分はコーラス入れたりね」

「六十年代のロックで、リーダー死んでいるから、本格的な再結成は無理だ。でも、先生泣いちゃったぞ」

「俺も俺も」

隆は興奮し、饒舌になりつつある。

そこでチャイムが鳴って、

担任は隆の肩を軽く叩いて、教室を出て行った。

昼休みになり、松尾と昼食を食べている。

「それ、メグちゃんの手作りだろ、いいな」

「別に普通だろ、何がいいんだ？」

「おまえってやつは、女心もとい、妹心のわからんやつだな」

「アリエネ弁当」ときで大げさだな」

「じゃあくれ」

松尾が隆の弁当に箸を落とそうとするが、隆はことごとく避けていた。

そんな隆を生温かい目で見ている松尾。

「ライブのとき、メグちゃんのサンタ姿、かわいかったぞ」

松尾がそう言つと、隆は思い出したように、

「おまえさ、恵と何かたくらんでただろ」

「何のことだか」

「椿のことだ」

「何のことだか」

そう言っていると、後ろから声がした。

「あの……隆さんバンドの件でお話があるんですけど、今いいですか？」

声だけを聞いて隆は、辛辣な表情を作った。

「おまえな、いい加減あきらめろよ」

と、振り返つて一瞬だれと話しをしているか喪失した。

「僕、少しはましになりましたか？」

良太は恥ずかしそうに、はにかみながら言った。

「驚いた！ 食ってるもの吐きそう」

良太は笑い声を上げた。

「おまえさ、えっと、羽柴……良太だよな？」

「はい、そうです」

「すげえな、デヴューしたな！ 遅い高校デヴューおめでとうな。

まさかここまで変わるとは」

松尾も驚いている。

「あ、ありがとうございます！」

「前向きなオタクだなとは思ってたが、顔と内面が合致したな。ああ、俺、そこらへんにいる、趣味も情熱も何もないやつより、オタクの方がましだと思ってるから、安心しろ」

良太はまじまじと聴いている。

「みんなが好きと言ったら好き、ファッションにしろ、音楽にしろ。個性も何もねえからな……これからが大変だぞ、とにかく、自分の色を見つける、雑誌もみなきやな、しかしよくがんばった」

良太は涙ぐんでいる。

「じゃ、じゃあ、一緒にやってくれるんですね？」

「それとこれとは話が違う」

松尾が額に手を置いた。

「あの、約束が……」

「何？ 俺、おまえが変わったら話は聞くって言っただけど、入るとは言っただけ」

「そうでしたね……でも僕絶対にあきらめませんから」

「ま、でも、これから気軽に話しかけれ、じゃあな」

良太は教室から出ていった。

土手の小道には、重そうな衣服を着込んでジョギングしている主婦。

その下、河川と青い草の斜面に挟まれた広場には、犬の散歩をする少女、

隆は学校が終わると、家には帰宅せず、近所の土手で川縁の石段に腰をかけて、首からノートをぶら下げている。

目を閉じ、息を吸い込み、歌い出した。

その歌声はこの光景に違和感を与えず、空気のように透明に流れていった。

時折、口を動かすのを止めたかと思えば、ノートに何かを書き込んでいた。

隆が父、宏大の影響で六十年代の音楽を好きになり、初めて歌ったのがこの場所だったのだ。それからというもの、毎日隆は歌った。宏大は、二歳の隆が英語でLucyと発し、歌い出したとき、大粒の涙を流して喜んだのだ。

幼い隆は抱きしめられながらも、

宏大に対して、こうすれば喜んでくれるんだ。と感じ、ますます歌にのめり込んでいった。

それと知らずに歌うという英才教育を受けていたのだ。

隆の家庭は、世間一般家庭とは少々異なっており、父、宏大は女装している姿が普通であつたし、家事をこなしているのも当たり前であつた。

母、涼子は市内にある病院で看護師長をしている。

夜勤明けで機嫌の悪い涼子に、優しく声をかけマッサージをしていた、宏大の姿がそこにはあつた。

宏大が亡くなつてからというもの、涼子と隆はよくいさかいを起こし親子喧嘩がたえなかつた。

それは、当たり前前の母を父親として接してきたせいだろう。

事実隆は、宏大のことを母さんと呼んでいたし、涼子のことを父さんと呼んでいたのだから……。

この場所にくれば宏大の、あの後ろ姿をいつも思い出す。

エプロンをして、長い髪の毛を後ろでまとめたその様子を、隆は歌い終わると立ち上がった。

川面を見つめ、ふと羽柴良太のことを考えた。

放課後良太に廊下で出くわし、バンドの件を断り続けているのに関わらず、元気よく「さよなら」と言ってきた。

不思議なやつだ、隆はそう思った。

夕食どきになると、涼子はのろのろと起きて来て、恵の作った料理に舌鼓を打つ。

ビールを飲んで、

「うめえ！」

「お母さんオヤジくさいからやめて」

「バカ息子、メグが言う長電話の相手はだれだ、女でもできたか？」

夕食に手をつけようとした隆に涼子が言った。

「友達友達」

「おまえ友達いたか？」

「失礼な」

「松尾君に椿ちゃん？」

「……」

「メグが言うには、ライブのとき女と逃げたらしいな、バカ息子」  
涼子はニヤニヤと笑っている。

「恵！」

隆が一喝すると、

「だって、おにいちゃんが悪いんよ……」

と、言つて恵はテレビの方を向いた。

「おまえには関係ねえ」

「何イ」

涼子は怒鳴りながら隆の眉間に箸を直撃させる。

「もう、二人ともやめてよ。S A Y Aの曲が聴こえないから」

テレビは音楽番組をやつていて、ランキングを行っていた。

女性アーティストの歌が流れている。

「おまえさ、食べるのやめてまで、見るもんじゃねえだろ」

「おにいちゃんと音楽の話したくない。S A Y Aは違うんよ！」

「おいバカ息子、妹の夢を壊すな。おまえと、宏大さんは音楽の話になると、斜め上をいきすぎている」

「俺のことはいいけど、母さんのことけなすなよ！ ボケ！」

涼子はさつと立ち上がった。

「やめてよ！ もう……おねがいやけん」

多少の喧嘩ならとりあわない恵だが、さすがに止めに入った。

静まり返る居間、隆は夕食も早々に切り上げ部屋にこもった。

涼子は仏頂面で一升瓶の焼酎をグラスにくむ。

恵は番組が終わると食器を片付け始め、台所から洗い物をする音が寂しく響いた。

いつもの時間に真紀から電話がかかったが、隆は今までのように、

放置することなくすぐに出た。

そして隆は、夢うつつの中、なぜ宏大が死んでしまったのか、どうして歌が好きなのかと、いったことを淡々と真紀に聞かせた。

その日は一言も真紀は「ちよつと待ってちよつと待って」とは言わなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7681z/>

---

ウレハ

2012年1月1日21時47分発行